Japanese Council of Science Museums Newsletter Vol.32. No.1

全科協ニュース

URL http://jcsm.kahaku.go.jp

全国科学博物館協議会　東京都台東区上野公園　国立科学博物館　〒110-8718　Tel.5814-9857・9858　Fax.5814-9898　平成14年1月1日発行（通巻第182号）

特集　イギリスの博物館事情

新しい財源が博物館を変える―イギリスの国営宝くじと科学館

国立歴史民俗博物館　研究支援推進員　竹内　有理

イギリス人と賭博の歴史は古い。スポーツ、ゲームなど生活の様々な局面で人々が楽しんでいた賭博を国が正式に認めたのは16世紀のことである。それ以降、政府公認の賭博＝宝くじが行われるようになった。現在、イギリスで行われている国営宝くじ（National Lottery）は、1993年に国営宝くじ法（National Lottery Act）の制定によって始められたものである。わが国でも、自治体を通して宝くじの収益金を公益事業に充当しているが、イギリスでも収益金を文化や福祉、教育事業などに配当しており、その規模は世界に類を見ないものといえる。博物館や科学館もその多大な恩恵を受け、久々の博物館ブームの到来とでもいうべき状況を迎えている。ここでは国営宝くじの中でも博物館や科学館に関わることについて、その内容を紹介する。特に、科学館に関わることについては、ミレニアム委員会による助成について詳しく取り上げる。

■国営宝くじ

まずは、どのように博物館や科学館が新たな財源として国営宝くじの恩恵を受けているのかを知るために、国営宝くじ自体の内容としくみについて見ていくことにする。

宝くじの収益金の一部を文化や福祉、教育などの公共的な事業に充てようと考えられたのは、優れた活動をしているにもかかわらず、国の助成をなかなか受けることができないものやあまり目立たない小さな活動などに対して支援する目的を持っている。

「国営 National」という名が付いているが、宝くじの運営と収益金の配当は国が直接行うのではなく、外部の組織に委託されている。宝くじの宣伝等の運営については、カメロンという民間企業が請負っており、収益金の配当は対象となる分野ごとに既存の支援機関または新たに設立された専門の機関によって審査され、配当されるしくみになっている。

その対象となる分野と助成申請を受理、審査する配当機関は以下の通りである。

① スポーツ（The Sports Councils）
② 芸　術（The Arts Councils）
③ 福　祉（The Community Fund）
④ 文化遺産（The Heritage Lottery Fund）
⑤ 健康・教育・環境（The New Opportunities Fund）
⑥ ミレニアム（The Millennium Commission）

これら6つの分野に当初の予想を上回り、7年間で120億ポンド（1ポンド＝180円で換算すると2兆1,600億円）が配当された。言うまでもないが、これは宝くじなので宝くじの収入の50%は賞金に充てられ、28%が文化や福祉等の公共的な事業に充てられている。

これら6つの分野のうち、博物館や科学館に関係が深いのは④文化遺産と⑥ミレニアムである。ここで断っておくが、「博物館や科学館」という言い方をしているのには理由がある。わが国では博物館法の中では、科学館は博物館に含まれているが、イギリスでは実物資料からなるコレクションを持たないという理由で、科学館（science centres）は博物館には含まれない。博物館は文化や遺産、科学館は教育の範疇に入れられている。一方、近年、博物館の教育的側面が強くなるにつれ、両者の境界が縮まりつつあるのも事実である。

このように、博物館と科学館が異なる概念で捉えられているため、宝くじの配当を決める審査機関も前者は遺産宝

くじ基金（The Heritage Lottery Fund)、後者はミレニアム委員会（The Millennium Commission）と異なっている。

助成を受ける条件としては、パートナーシップファンディングといって助成額と同等の資金を他から獲得していなくてはならない。自治体や助成団体、個人などから助成を受けることが多いが、宝くじの配当を受けるためには、それと同じ額を自助努力によってまかなわなければならない。

■ミレニアム委員会

次に、主に科学館が恩恵を受けているミレニアム委員会について見ていくことにする。同委員会はこれまでに、イギリス全土の200以上の建設や開発プロジェクトに対して、10億２千万ポンド（約1,836億円）を投入している。

ミレニアム委員会が対象とするのは、２千年紀の終わりと３千年紀の始まりを祝うための地域に根ざした様々な活動である。ミレニアムに関わるプロジェクト、人々、フェスティバル、そしてロンドンに2000年の１年間だけ開幕したドームがその対象となる。さらに、次の５つのテーマのいずれかに該当することが条件となっている。

① 持続可能な環境を推進する
② 科学・技術の振興
③ 都市の活性化
④ 教育への投資
⑤ 地域の支援

この中で科学館に最も関係が深いのは、②科学・技術の振興というテーマである。新しい科学館の建設やインタラクティブな展示、アウトリーチプログラムなど、先進的な事業に対して助成を行っている。このミレニアム委員会からの助成によって、14の新しい科学館（science centres）が誕生した。

前述した遺産宝くじ基金は、既存の科学系の博物館（science museums）のプロジェクトに対して助成を行っている。ロンドンの国立科学博物館内に新しくオープンしたウェルカムウィングは、この遺産宝くじ基金とウェルカムトラストの助成により建設されたものである。

前述したパートナーシップファンディングとして投入された宝くじ以外からの資金を合わせて、1996年以降イギリスの科学館や科学系博物館に投じられた資金は総額４億５千万ポンド（約810億円）にものぼる。イギリスの科学館および科学系博物館がいまだかつてない建設ラッシュを経験していることがこの額を見ただけでも明らかであろう。

ミレニアム委員会による助成プロジェクトの中で、前述の②科学・技術の振興に関わるものだけを挙げると表１のようになる。この中で見ると、バーミンガムにできたミレニアムポイントの助成額が最も多く、５千万ポンド（約90億円)、続いて＠Bristolの4,515万ポンド(約81億2,700万円）となっている。

施設全体の建築に関してのものもあれば、一部の展示についてのものもあるが、共通しているのは科学や技術をテーマにしているだけでなく、その内容が体験型のハンズオン展示であったり、教育的要素を強く持っていることである。さらに、その施設の建築が地域の活性化の起爆剤として期待されていることも共通した特徴といえるだろう。

■博物館に対する新しい支援のあり方

かつて、わが国もバブル経済の恩恵を受け、地方自治体がこぞって博物館や美術館の建設を行った。「箱物行政」とか「仏つくって魂入れず」などの非難を受けながらも80年代から90年代にかけて博物館、美術館の数が急速に増えていった。

イギリスの国営宝くじによる助成、特にミレニアム委員会が対象とする助成は施設の建設に対して行われるため、わが国の箱物行政を彷彿させる部分がなくもない。しかし、これが国民や市民の税金でまかなわれているのではなく、宝くじというきわめて個人的な行為からもたらされた財源である点が特徴といえる。そもそも上流階級といわれる社会的地位の高い人々は宝くじを買うことはほとんどない。労働者階級を中心にロウアーミドルクラスに属する人々までが宝くじの購入者のほとんどを占めている。導入当初はハイカルチャーといわれる文化や芸術に助成が偏っているのではないかという非難の声もあったが、その後、より広範な層の人々に行きわたるよう配慮されているようだ。宝くじを買わない層の人々が利用する文化芸術だけでなく、スポーツや地域のイベント、文化施設や教育施設などにも助成を行うことによって、宝くじの購入者もその恩恵を受けることができるという構造である。

これだけの規模の様々な活動や施設の建設に対する助成を支えているのは、イギリス人の「賭け事好き」な性格に拠っていることは言うまでもないが、新しい博物館の支援のあり方としてわが国でも導入できないだろうか。国や自治体の補助を受けずに独立採算で運営し、経済的に困難な

状況に追いこまれている博物館は少なくない。それらの博物館を支援するためにも助成のしくみがもっと整備されることを願う。

参考：

ミレニアム委員会　http://www.millennium.gov.uk
国営宝くじ　http://www.national-lottery.co.uk
ティム・コールトン著『ハンズ・オンとこれからの博物館』（東海大学出版会）2000年
Thomas,G., 'Claiming a Place for Science : Britain's Lotteery-Funded Science Centers and Museums', ASTC Dimensions, May/June2001
布施美穂「イギリスにおける宝くじ助成金による博物館支援－その限界と問題点をめぐって－」『博物館学雑誌』第23巻第1号 全日本博物館学会 1997年

表1：科学・技術の振興に関わるミレニアム委員会の助成プロジェクト

プロジェクト名(所在地)	助　成　額	施　設　概　要
@Bristol (イングランドーブリストル)	45,150,000ポンド	イギリスの先駆的な科学館の1つであるエクスプロラトリーを移転し、ブルストル市が湾岸地域再開発プロジェクトとして建設したもの。自然と科学をテーマにしたハンズオン展示とアトラクションからなる。
INTECH2000 (イングランドーウィンチェスター)	4,788,631ポンド	科学と技術をテーマにした施設。ハンズオン展示を取り入れ、ナショナルカリキュラムと連動したプログラムを提供。 2002年4月オープン予定。
International Centre for Life (イングランドーニューキャッスル・アポン・タイン)	31,422,188ポンド	イングランド北東部地域のランドマーク的なプロジェクト。ハイテクを採り入れたビジターセンターが併設された科学をテーマにした施設。特に遺伝子研究が特徴となっている。
Island 2000 (ワイト島)	2,307,590ポンド	2つのビジターセンターからなる施設。教育サービス機能を持った恐竜の展示と植物園がある。
Magna (イングランドーロザラン)	22,800,000ポンド	製鋼工場を科学館に改装。製鋼の4要素である土、空気、火、水をテーマにしたハンズオン展示を採り入れた4つのパビリオンからなる。 2001年9月オープン。
Making It! Discovery Centre (マンスフィールド)	1,772,024ポンド	ビール工場を改装してつくられたビジターセンター。科学館と家族向けの教育サービス施設からなる。資源と製造をテーマにしている。 2001年12月オープン。
Millennium Point (イングランドーバーミンガム)	50,000,000ポンド	技術と教育をテーマにした世界規模のディスカバリーセンター。マルチメディア技術と歴史・美術資料を組み合わせた展示を行う。
National Space Centre (イングランドーレスター)	29,650,000ポンド	宇宙科学をテーマにした学習施設。展示センター、宇宙シアター、チャレンジャー・ラーニングセンター、研究センターの4つの施設からなる。
Our Dynamic Earth (スコットランド)	16,315,000ポンド	地質学をテーマにしたビジターセンター。エンターテイメントと教育的要素を兼ね備えた参加型の展示が特徴。地球の誕生、進化、自然災害などを扱う。
Sensation (スコットランド)	1,750,000ポンド	2000年7月にオープンした科学ディスカバリーセンター。ハンズオン展示を採り入れたエンターテイメントと教育的要素を持った施設。人間や植物の感覚について扱う。
The Big Idea (スコットランド)	5,590,037ポンド	ビッグバンや宇宙探索、ノーベル賞など人類の発明と発見の歴史を扱った展示とアトラクション施設。
The Deep (イングランドーハル)	18,476,000ポンド	地域のランドマークとなる千年紀プロジェクト。世界の海をテーマにしたディスカバリーセンター。 2001年12月オープン。
The Glasgow Science Centre (スコットランド)	35,225,000ポンド	プラネタリウム、インタラクティブシアター、テーマ展示ギャラリー、教育・デモンストレーション設備、IMAXシアターからなるエクスプロラトリウム。

イギリス博物館展示事情 The Natural History Museum

株式会社ココロ　動刻部部長　三田　武志

はじめに

弊社ココロはアニマトロニクス（展示用ロボット）を企画制作する会社である。製作されたアニマトロニクスは常設展示用及び移動展示用として、日本国内・海外において展開をしている。私たちは1980年代からアメリカ市場で、1990年代からはヨーロッパ市場でその展開を行い、現在にいたっている。今回は私たちがアニマトロニクス製作会社として、イギリス・ロンドン・サウスケンジントンにあるThe Natural History Museum（以下、NHM）と各種の共同事業を通じて見た、展示構成とその活用についてまとめてみたい。

入場料金の撤廃と入館者数の減少

NHMにとって、2001年という年はその長い歴史の上からも画期的な年となった。それはこの年の12月1日から、すべての入館者に対して、入館料金が無料になったからである。イギリスを代表するThe British Museum（大英博物館）など一部の例外を除いて、イギリスの他のほとんどの博物館は公共・私設を問わず入場料金を徴収している。博物館にとって入場収入は収入の中でも大きな比率を占めるものである。ちなみ、NHMの場合も例外ではなく、2000年度（2000年4月～2001年3月）における、博物館収入（寄付やスポンサーシップを除く）における入場収入の割合は32.35%となっている。これだけの収入がなくなってしまうということは博物館にとって、収益バランスの上から大きな転換を迫られることとなる。

一方でNHMはここ数年、博物館への入館者数減少という問題を抱えている。

	入館者数①	ウェブサイト	移動展示②	学校動員
1998/1999	1,859,000	1,023,000	1,600,000	171,000
1999/2000	1,747,000	1,696,000	2,000,000	160,000
2000/2001	1,660,000	3,110,000	2,300,000	130,000

註①：サウスケンジントン本館及びトゥリング別館の入館者
②：イギリス国内及びイギリス国外
"Annual Report 2001, The Natural History Museum" より

これを見ると館そのものへの入館者数はもちろん、学校動員数も減少の一途をたどっている。一方人数が増加しているものとして、ウェブサイトを通じてのコンタクト人数と移動展示による集客数である。特に注目すべきは、1999年度において、移動展示による集客数が、NHMそのものへの入館者数を上回ったという点である。そして2000年度にはさらにその差が広がっている。

魅力ある移動展示

ここにいう移動展示とは、NHMが企画・構成した特別展示を、NHMにおける展示期間終了後にヨーロッパ・アメリカ・中近東・アフリカなどの地域を巡回展示するものをさす。NHMにはこの巡回展示事業を専門に行うTouring Exhibitionという部署がある。この部署の前身は、ココロのアニマトロニクス展示巡回のために1990年に構成されたKOKORO Exhibitionという部署である。その後、博物館自体で構成した独自の展示物をパッケージ化して巡回展示を行う業務へとその業務範囲を広げた。この移動展示という分野において、NHMはヨーロッパ内における先駆者的存在であり、現在でもヨーロッパ内においてこの分野のリーダーとして一目を置かれている。そのきっかけとなったのが、私たちの会社との総合的な協力関係であった。

1980年代にアメリカで盛んになったアニマトロニクスを科学教育展示として活用する動きは、ヨーロッパへと波及し、その最初の開催場所がNHMであった。NHMはその集客性・話題性・収益性に注目し、イギリスから見て、はるか極東に位置する日本の小さな会社であるココロと、まようことなく協力関係を結ぶ決断をした。その後、ココロからは恐竜や昆虫をテーマとする移動展示セットを定期的に投入した。アニマトロニクスで構成する展示は、各地で好評を博した。しかしこの時期の展示は、アニマトロニクスが主体であり、それにNHMが若干の展示物を付加するというものであった。

1997年NHMは、このアニマトロニクスの特性を活かし、NHM自身が企画する特別展示の中に、ココロの展示制作技術を導入すること試みた。NHMも展示構成予算を確保

し、ココロもアニマトロニクス製作を通じて投資を行い、その収益を両者で分配する方法が取られた。1998年、このようにして産まれた最初の特別展示「Myths & Monsters Exhibition（神話とモンスター展）」がスタートした。本展はNHMでの展示期間終了後、ヨーロッパ各地を巡回して現在にいたっている。そしてさらに2001年には、第2弾として、「Predator（プレディター展）」がスタートする。これは現在開催中であり、2002年5月の開催期間終了後に、移動巡回を開始する。この他にもBG（ブリティッシュ・ガス社）をスポンサーとし毎年開催される世界的写真展示会である“Wildlife Photograph of the Year”などもNHMの移動展示として有名である。現在では、これら各種の移動展示が世界各地で開催されており、それぞれの会場での集客人数の合計が、NHM自体の入館者数を上回ることになった。

常設展示と移動展示のリンク

上述をしたように、NHMの移動展示は、Touring Exhibitionという部署が行うが、この部署はMarketing and Business Development部門（以下、M&B）に属する。一方で、常設展示及び特別展示を構成するのは、Exhibition and Education部門（以下、E&E）である。E&Eは特別展示について、5ヵ年計画をたて、展示のテーマ・対象観客・収益面などのバランスを熟考しながら、慎重に展示内容を決定していく。自然科学研究及び教育機関として、常に最新の情報提供を行う義務を全うするとともに、自然科学に興味を持つ次世代を担う子供たちを創出するために、話題性を提供することは欠かせない。

E&Eが展示構成をした特別展示は、期間終了後M&Bに委託され、館外での移動展示として用いられる。上述の1998年の「神話とモンスター展」以降、E&EとM&Bは特にその企画の初期段階から密接な連携をとるようになった。E&Eが企画構成する展示は、NHMでの展示における集客性を重視することはもちろん、その後の館外での移動展示の簡便性や地域をこえた普遍性をも併せ要求される。具体的な展示内容については、E&Eを中心に進めるが、移動展示に必要な設置・撤去の際の簡便性、運搬時の問題などについては、M&Bの意見を取り入れながら進めていく。また開催前の、事前告知・プレスリリースなどは連携しておこなう。さらに特別展示開催時のVIPオープニングなどには、NHMとしてのVIPの他、将来的に移動展示の顧客となりうるイギリス国内外の博物館関係者も招待される。

新技術の導入と話題性の演出

特別展示・移動展示を常に魅力あるものにしていくためには、新しい展示技術を大胆に導入していく必要があるとNHMは考える。10年以上前から、ココロのアニマトロニクスを大胆に導入したことで、移動展示というビジネスをいち早く構築した。

2001年2月、恐竜展示コーナーに新たに展示された空圧サーボ制御を用いたココロのティラノサウルスは、口から異臭を放ち、リアルな動きを見せた。このティラノサウルスを見学しようと、2週間に20万人以上の観客がサウスケンジントンにおしかけた。観客は3時間ほど待たないと、このティラノサウルスを見ることができず、長蛇の列は館外のサウスケンジントンのチューブ（地下鉄）の駅まで続いた。冒頭に紹介した年間入場者数に対して、この人数がいかに特別なものであるかは一目瞭然である。この人気の秘密には伏線がある。同種のティラノサウルスを、前年2000年6月に3週間だけ予告無しにエントランスホールに展示をした。そのうわさを口コミでききつけた多くの人々がNHMを訪れた時には、このティラノサウルスは既にフランスでの展示のため、ドーバー海峡を渡っていた。しかしNHMはその際の問い合わせ件数の多さに着目した。2001年2月にティラノサウルスを常設展示として展示する際に、各種マスコミに対して、「あのティラノサウルスが帰って来た！」と大々的なプレスリリースを行った。そして多くのマスコミを通じて、ティラノサウルスのニュースがイギリス内、そして世界各地へ配信された。

E&Eが新たな展示技術・展示手法を積極的に導入し、一方でM&Bがその話題性作りを演出する。さらにM&Bが移動展示を通じてNHMを世界にPRするとともに、館内以上の集客及び収益を確保していく。このティームワークと積極性が、これまで以上にNHMの魅力を高めている。

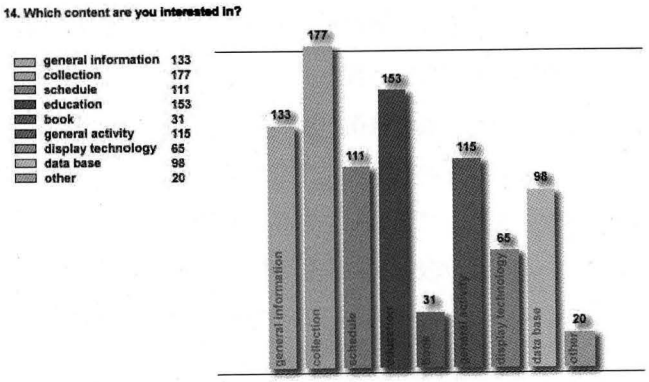
英国博物館事情　ホームページ

インターネットミュージアム事務局　ディレクター　**大野　振二郎**

本稿では、ここ数年のインフォメーションテクノロジーの発展、ネットワークインフラ整備の実現を可能とした、博物館活動におけるホームページの役割として、重要視されるようになったオンラインデータベースについて、大英博物館のCOMPASプロジェクト、the Scottish Cultural Resources Access Network（以降SCRANと表記）を通して触れたい。また、最後に今後、世界の博物館オンライン活動の主軸となるであろう『博物館専用トップレベルドメイン（.museum)』についてその概要を紹介する。

英国の博物館関連インターネットサイトとしては、オックスフォード大学が推進するVirtual Libraryの一部として発展した『Virtual Library museum pages *1』（以降VLmpと表記)が特に有名である。VLmpは世界のミュージアム情報が集結するサイトとして世界的な評価を受け、現在は国際博物館会議（ICOM *2）の支援を受け運営されている。インターネットミュージアム事務局*3はVLmpと共同で、1998年に世界26ヶ国、997博物館を対象に『博物館活動とホームページの動向』を調査目的としてアンケート*4を行い、翌年1999年に米国ニューオリンズで開催されたミュージアム&ウェブ国際会議*5で、VLmp運営者であるジョナサン・ボーエン氏によりその結果を発表した。この1998年のアンケートでは、博物館職員として興味を持つホームページコンテンツとして表1のような結果が出た。

表1：ホームページコンテンツ



アンケート結果順

①収蔵品紹介

②教育普及活動

③博物施設基本情報

④博物館活動紹介

⑤企画展等のスケジュール

⑥データベース利用

⑦展示技術紹介

⑧書籍紹介

⑨その他

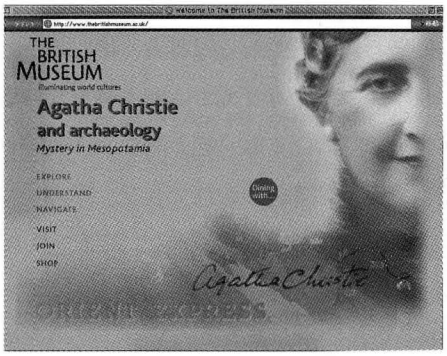
上位2コンテンツ、①収蔵品紹介、②教育普及、を実現するオンラインコンテンツ手法として適しているのが収蔵品検索を目的としたデータベースの利用といえる。

大英博物館 COMPAS プロジェクト*6

COMPASは、Collections Multimedia Public Access Systemの略称であり、大英博物館の収蔵品情報の検索を目的として開発されたデータベース検索システムであり、2000年6月にオンライン公開された。現在は大英博物館の学芸員によって選出された約5,000の収蔵品情報の検索が可能である。検索結果ページは、収蔵品画像、解説文章(一般利用者を意識して、極力美術専門用語を排除)、関連収蔵品へのリンク、関連書籍の紹介があり、特質的なのは、収蔵品高画質画像のデジタルデータを購入しダウンロードを行う事を可能にしている事が挙げられる。また、オンライン情報と実際の展示空間との融合の試みとして、COMPASで得た情報を元に、クイズ形式で展示室ツアーを行い、収蔵品を実際に目にする事により、クイズを完成させるといった手法が取られている。このCOMPASを利用したクイズ形式ツアーは、定期的（月単位）に追加され、来館者は常に新しいツアーを行う事ができる。また、現在、COMPASをオンラインで利用し、小学生（7歳～11歳が対象）の教室利用教材としての使用を検討中であり、試作コンテンツを小学校教師が試験利用している。

このように大英博物館では、収蔵品データベースを核に、①高画質画像のオンライン販売、②ツアーによる展示空間との融合、③データベースを利用した遠隔教育、と言った試みを行っている。大英博物館のCOMPASオンライン公開利用規約で特記すべきは、収蔵品を紹介する個々のページへのリンクを許可している事だ。例えばURL『http://www.thebritishmuseum.ac.uk/compass/ixbin/goto?

OBJ67』は、ロゼッタストーンを表示する。このように個別ページへのリンクを許可する事により、個人利用であれ、学術利用であれ、大英博物館の収蔵品コンテンツを利用して独自のページを作成する事が可能になり、学校教育利用、収蔵品情報の共同利用を容易に実現させる事になる。



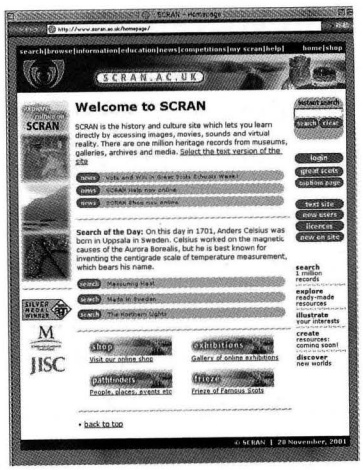
大英博物館ホームページ
http://www.thebritishmuseum.ac.uk/

SCRAN[*7]

SCRANはアメリカ博物館協会(the American Association of Museums) が主催する優秀なオンラインサイトへ贈られる賞であるMuse Award of AAMの収蔵品データベース・参考文献リソース部門で銀賞を受賞した。本年度、北米以外にある施設が運営するオンラインサイトで受賞したのは、SCRANだけである。受賞理由として『メディア・テクノロジーを活用した収蔵品データベースとして最高水準にある事が承認された』とある。

SCRANデータベースでは、現在約100万の文化・歴史・科学に関する項目が収納され検索する事ができる。データベースコンテンツとして、テキスト情報、画像情報の他、ビデオ動画データ、バーチャルリアリティーデータなども含まれる。SCRANの特色は、全ての情報は、アカデミック目的に限り著作権をクリアーしたものであり、教室での使用、教材開発目的での使用、教育目的使用のポスター、チラシなどの原稿として自由に使う事が可能であるという事がいえる。また、SCRANの年間使用料を支払う事により、高画質データ、高品質データのファイルを使用する事ができる。学術研究情報源として、またオンラインミュージアムとして、まさに現在の最高水準データベースと言える。

データベース利用の新しい試みとしては、『Virtual Exhibitions』と題されたプログラムを公開している。SCRAN上のデータを利用して、ユーザーが学芸員となり、自分独自の企画展をオンライン上に公開する事ができるというものであり、SCRANのリソースを個々の切り口で有効利用する事を可能にする。



SCRANホームページ
http://www.scran.ac.uk/

博物館専用トップレベルドメインサービスの開始

国際博物館会議（ICOM）は、ドメイン名管理の非営利組織ICANNに対して、博物館情報である事を意味するトップレベルドメインとして『.museum』を申請し、本年2月に受理され、ミュージアムドメイン管理協会としてMuseDoma[*8]を設立した。MuseDomaは本年6月より『.museum』の申請受付を開始し、本年11月にトップレベルドメイン『.museum』の運用が開始された。『.museum』は、美術館、博物館や関連団体、個人が取得する事が可能であるトップレベルドメインであり、最大の運用理由は、学術情報と一般情報の差別化である。英国におけるCOMPAS、SCRANが学術目的利用に限定して所持するデータを共有するように、トップレベルドメイン『.museum』は、世界の博物館関係サイトが、それぞれが持つ人類共有財産である文化情報を横断的に共有するネットワークを構築する基盤となりえるのではないだろうか。

＊1：Vietual Library museum pages (http://www.icom.org/vlmp)
＊2：国際博物館会議（ICOM）　(http://www.icom.org/)
＊3：インターネットミュージアム (http://www.museum.or.jp)
＊4：博物館活動とHPの動向 (http://www.museum.or.jp/IM-english/f-survey.html)
＊5：Museums and the Web (http://www.archimuse.com/)
＊6：大英博物館HP (http://www.thebritishmuseum.ac.uk/)
＊7：SCRAN　(http://www.scran.ac.uk/)
＊8：MuseDoma　(http://musedoma.museum/)

海外ニュース

安井亮・桜美林大学講師（博物館学）

英コーンウォールに、国立海事博物館が開館

イギリス本島の最西部にあるコーンウォール半島に、新たな国立海事博物館が開館されることになった。2002年6月に開館する『コーンウォール国立海事博物館』は、地元コーンウォール郡政府が中心になって、グリーニッヂ国立海事博物館およびコーンウォール大学などの協力を得て、整備が進められている。同館の常設展示は、主に漁業が昔から盛んだったコーンウォール半島の漁船やヨットなどの小型船舶が中心に紹介されることになっている。建設地は、コーンウォール半島の観光の名所である港町ファルマスであり、年間180万人の観覧者が見込まれている。

デザイン性の優れたバリアフリー道具展が、英レスター市立美術館で開催

障害者の福祉に関する法的環境が整備しつつある現在の日本では、依然として「近視ではなく肢体不自由という能力障害がある場合、そのハンディは重い。街の中で生活することすら困難な場合が多い。ところが、その能力を補う道具、すなわち、補装具と呼ばれたり、リハビリ機器とか福祉機器と呼ばれていたテクニカルエイドが、ほんとうにその人に合っていて、なおかつその道具がその能力を十分に発揮できるような環境になっていれば、ハンディはかなり軽くなる。」（光野有次『バリアフリーをつくる』岩波新書「はじめに：目からウロコ」より）一方イギリスは、北欧諸国と同じように、障害者の社会参加が活発であり、障害者のための優れた「日常の道具」が広く普及している。しかも、その優れたところは、使いやすさという機能性に止まらず、デザイン性も優れたものが多く開発されている。もっとも、そのイギリスにおいてでさえも、コスト性と機能性が重視されてきたため、当の利用者に喜ばれる「デザイン性」はなおざりにされてきた。こうした伝統に対して、真正面から、当の利用者である障害者と彼らのための道具を考えるデザイナー（イギリスでは障害者を含む場合が多い）とメーカーの三者による、絶え間ない「共同」の努力が、第二次世界大戦以降続けられてきた。その一つの大きな果実が、先頃レスター市立美術館で開催された特別展『adorn, equip』（2001年9月8日－10月18日）である。同展は、レスター美術館が企画の中心となって、3年の準備をかけて、調査と、障害者福祉団体および障害者との共同作業を通じて完成したものである。実行委員の一人であり、会期中に自らアーチスト・イン・レジデンスとしてワークショップや観覧者との対話を主催したマルチメディア・アーチストのジュ・ゴスリング自身(Ju Gosling)も、29歳の時に突然身体と内蔵を圧迫するショイエルマン病(Scheuermann's Disease)に罹って、現在でも身体的不自由に悩まされながらもデザイン界で活躍している人のひとりだ。2000㎡の広さをもった同展では、障害者のためにつくられた、デザイン性の優れたバリアフリー道具が、六つのテーマの中で用意された。「日常の生活道具」では、機能性とデザイン性を同時に重視した食器類と調理器具が紹介され、「ファッションと衣服」では、広場恐怖症の人のために開発されたハンドバッグ、障害者の身体をやさしく包む華麗なサリー（インドの女性が着る伝統的な民族衣装）や、ゴスリン

観覧者と語る Ju Gosling（Courtesy Ju Gosling）

装身具を制作中の Andrew Logan（Courtesy Ju Gosling）

グさんのために特別につくられたギプス等が紹介されている。また「小物類」では、装飾された錠剤入れ、いぶし銀の吸入器のホルダー、装飾された補聴器、弱視の人のための小型ライトつきの指輪等が紹介され、「移動補助具」では、美的観点からみた義手と義足の発展の歴史が紹介されている。さらに「生活を楽しむ」では、車椅子に装着できるバッグ、脊椎の障害をもった人用につくられた快適イス、さまざまな色の持ち手や、手こぎ三輪車が紹介され、「補装具」では、機能性とデザイン性を同時に重視した杖と義足が紹介されている。展示された道具類の多くは、ゴスリングさんがデザインしたホームページで、それぞれの道具ごとに、説明書き、デザイナーのデザイン意図と写真が紹介されている。なお同展は、レスター市立美術館を皮切りに、ポーイ市の「オリエル31」、ブラッドフォード市のブラッドフォード産業博物館（2001年12月15日－2002年2月3日）と、ラグビー市のラグビー美術館・博物館（2002年２月19日－４月７日）の各所で開催予定である。

日本では、障害者の作品を紹介した美術展は各地で開かれているが、まだ障害者のための、そうしたデザイン性と機能性が同時に優れた道具の展覧会が開かれたことがない。それゆえ、こうした企画が誕生することが強く望まれる。

参照：www.adornequip.co.uk

英政府の助成を受けたオンライン博物館総覧がフル稼働に

英政府の全面的な助成を受けて1999年にスタートしたオンライン博物館総覧『24時間博物館』は、このほど試験期間を終え、2001年11月よりフル稼働の体制に入った。イギリスにある2500館の博物館のすべてが網羅され、開館時間、住所、ホームページ等の基本情報の他に、収蔵品、常設展示、教育プログラム、イベント、障害者にとっての利用のしやすさ（Accessibility）、展覧会の開催情報やオンライン展覧会等の情報が豊富である。中でも、日本にいるとイギリスの博物館のミュージアム・ショップでの売れ筋商品に関して、まとまって入手できる情報は限られ、その上内容も偏りがちだが、『24時間博物館』では季節ごとに売れ筋商品に関する調査にもとづいた商品の紹介がなされている。日頃からミュージアム・ショップの商品が気になる者にとって、コレは嬉しい。政府からの十分な助成があるために、掲載情報の更新にも力を入れている。現在、月に平均37,000件の利用がある。

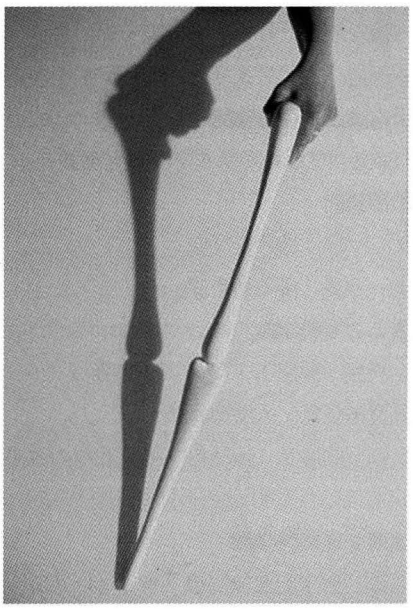
参照ホームページ：www.24hourmuseum.org

インドに初めての恐竜博物館が開館

インド中央の地方都市ハイダラバードに、インドにとって初めての恐竜を扱った専門博物館『ハイダラバード恐竜博物館』が、このほど2001年5月に開館した。同館の目玉展示は、全長が4.5メートルのコタサウルスの一種である恐竜の骨格標本だ。その他に、恐竜のタマゴの化石や樹木の化石が常設展で紹介されている。いずれも、ハイダラバードがあるアーンドラ・プラデーシュ州の熱帯雨林での発掘で20年前に発見されたものだ。

＊（やすい・りょう）　E-post: RGYasui@obirin.ac.jp

Andrew Logan 作の特注ギプス他（Courtesy Ju Gosling）



Felicity Shillingford 作の杖（Courtesy Ju Gosling）

1月2月の特別展

札幌市青少年科学館

冬の特別展「算数と遊ぼう！」　1月5日～20日

岩手県立博物館

テーマ展「県北畑作農家の生活用具」　1月22日～5月6日

栃木県立博物館

テーマ展「木の良さ再発見」　1月13日～4月7日

群馬県立自然史博物館

開館5周年記念「ミュージアムポスター展」
1月4日～2月17日

埼玉県立自然史博物館

企画展「ちちぶの鳥やけものたち」　1月6日～6月10日

交通博物館

写真展「国境の除雪列車」　12月18日～3月10日

ＴＥＰＣＯ銀座館

感情を誘うエネルギー～新島ガラスのアート展～
1月10日～22日

第5回「エネルギー賞展」入賞者展　1月24日～2月5日

第3回「エネルギー賞展」グループ展　2月7日～19日

国立科学博物館

特別企画展「化石の美と科学」　12月4日～2月17日

筑波実験植物園

企画展「ラン展」　2月10日～17日

機械産業記念館（TEPIA）

第14回展示「循環型社会を目指す新技術展
～豊かなエコライフの実現に向けて～」パートII
1月18日～3月22日

たばこと塩の博物館

企画展「金子コレクション　寄木細工
～海を渡った日本の木工芸～」　12月22日～2月11日

企画展「古代アメリカの動物デザイン」　2月23日～4月7日

府中市郷土の森博物館

「2001　ワイルドライフ写真大賞展」　1月27日～3月31日

馬の博物館

テーマ展「馬の玩具展」

テーマ展「馬の切手展」　1月5日～3月17日

横浜こども科学館

企画展「体感！チャレンジ広場」　11月3日～3月10日

横須賀市自然・人文博物館

特別企画展示「地球科学部門30年の成果」
12月8日～1月30日

新潟県立自然科学館

開館20周年記念特別展「サイエンスブック」
11月1日～1月30日

黒部市吉田科学館

富山県天文学会活動写真展「星空を追い求めて」
11月17日～1月14日

富山市科学文化センター

第10回「私の身近な自然」展　1月13日～2月17日

いしかわ動物園

「年賀状展」　1月13日～2月25日

飯田市美術博物館

特別陳列「日本最古のオオカミ類化石」　12月22日～2月24日

中津川鉱物博物館

第10回私の展示室「東濃の甌穴写真展」　12月2日～3月10日

東海大学海洋科学博物館

特別展示「“うま”に関連する魚たち」　1月2日～16日

ディスカバリーパーク焼津

特別展「トライ！サイエンス」～エネルギーを体験しよう～
12月12日～2月11日

あいち健康プラザ健康科学館

企画展示「～くらべて、遊んで、大発見！～　ヒトVSロボット　不思議なしくみ展」　12月22日～1月27日

半田空の科学館

2001年「自然の記録展」　2月2日～3月10日

トヨタ博物館

特別展「日本映画の中のクルマたち～スタアがいた。クルマがいた。～」　12月4日～2月11日

企画展「クルマのかたち　いろいろ展～チャンピオン集合～」
2月19日～4月7日

神宮徴古館農業館

新春企画展「絵でみる日本の歴史第6回―近代国家のあゆみ―」
1月1日～3月3日

滋賀県立琵琶湖博物館

第2回琵琶湖博物館民俗資料展「米をつくる道具―春・夏編―」
1月25日～3月3日

大阪市立自然史博物館

特別展「親子で遊ぶ木とのふれあいワールド」
12月8日～1月20日

兵庫県立人と自然の博物館

企画展「地震はどうしておこるのか？」
10月27日～1月20日

企画展「ワンダフルカラー」　2月17日～6月16日

明石市立天文科学館

「2002年全国カレンダー展」　12月15日～1月31日

「星・宇宙を描く年賀状展」　2月1日～28日

広島市こども文化科学館

ネイチャーフォト写真展　12月8日～1月13日

広島市交通科学館

春休み企画展「はたらくのりもの大集合―たんけん！　港ののりもの―」　1月29日～4月7日

愛媛県立博物館

特別展「花から果実へ」　2月2日～22日

テーマ展「えひめ生きもの写真展」　2月1日～3月24日

徳島県子ども科学館

第2回企画展「宇宙科学と探査衛星」　12月8日～1月7日

第3回企画展「数学と遊ぼう―かたちと数のワンダーランド―」　1月27日～3月3日

佐賀県立宇宙科学館

冬休み企画展「健康の科学　くすりと医術の今昔―解体新書大公開―」　12月18日～1月14日

冬の企画展「すばる望遠鏡―宇宙を探る新しい眼」　1月26日～2月17日

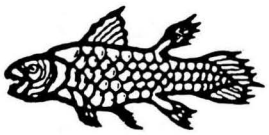
宮崎県総合博物館

開館50周年記念特別企画展「生きものたちからのSOS」　2月2日～3月17日

鹿児島県立博物館

企画展「鹿児島に生きる竹」　11月2日～1月20日

美術
はく製



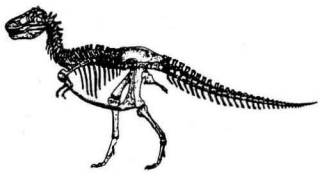
〈各種生物〉
剝製・骨格標本・レプリカ
加工／販売／リース

有限会社 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1　直通☎047-337-5678 ☎047-337-5883 FAX 047-338-1978

本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25　☎047-374-1564

※世界の化石・鉱物・恐竜・化石人類・動物骨格標本及び模型の輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 ゼネラル サイエンス コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL 03 (3583) 0731代表　FAX 03 (3584) 6247

歴史体感

ロボットが誘う、歴史伝説の世界

伝統文化の保存と伝承を目的とした施設、建設にも積極的に参加しております。

▲刀が振り下ろされるその瞬間、目が眩わんばかりの閃光が走る。

◀閃光に驚き、バランスを失う武士たち。

佐渡歴史伝説館／日蓮聖人　佐渡法難

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・設計・制御演出・施工

kokoro 株式会社ココロ

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
TEL：042-530-3939　FAX：042-530-4050
http://www.kokoro-dreams.co.jp/

—全科協情報—

○ミュージアム・マネージメント研修について

趣旨：博物館の現状を幅広い観点から理解するとともに、博物館の円滑適正な経営に資するよう、博物館の管理・運営に関する専門的・実践的研修を行います。

主催：独立行政法人国立科学博物館、全国科学博物館協議会

後援：日本ミュージアム・マネージメント学会

協力：東京大学大学院教育学研究科

期間：平成14年2月18日(月)～22日(金)

会場：国立科学博物館（上野）、東京大学（本郷）

対象：自然科学系博物館等の管理部門職員など

募集人員：40人

申込締切：平成14年1月15日(火)

詳細は、国立科学博物館教育部企画課研修係（電話：03-5814-9876　e-mail：fujimoto@kahaku.go.jp）へお問い合わせください。

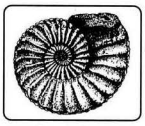
○平成13年度第2回総会・第9回研究発表大会について

日程：平成14年3月12日(火)～14日(木)

(12日：理事会・総会、13日：研究発表大会、14日：施設見学)

場所：大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区長居公園）

詳細については、後日、開催通知を送付いたします。

TOKYO SCIENCE CO., LTD.
ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本

since 1974
地学標本(化石・鉱物・岩石)
古生物関係模型(レプリカ)
大英博物館／恐竜復元模型
●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F　TEL.03(3354)0131(代表)
株式会社 東京サイエンス
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745
http://www.tokyo-science.co.jp E-mail:info@tokyo-science.co.jp

INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT
ONY KOBO CO.,LTD.
東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
TEL(03)3221-1102(代)　FAX(03)3221-1185

動物園／水族館／博物館
企画・設計・施工

ミュージアムの集客を強力にサポート
新たなコミュニケーションメディア【イベントナビ】
イベント情報ポータルサイト
EventNAVI
http://www.eventnavi.ne.jp
全国のイベント情報年間約10万件を発信するイベントナビ。
企画展・特別展などへの来場促進に、ぜひご活用ください。
イベント情報
無料登録受付中！
株式会社 乃村工藝社
本　社：東京都港区芝浦4-6-4 〒108-8565 電話 03-3455-1171(代)
ホームページ http://www.nomurakougei.co.jp
ディスプレイおよび建築の調査・コンサルティング
企画・設計・デザイン・プロデュース・演出・制作施工
ISO9001認証取得（文化環境カンパニー）ISO14001認証取得（MCカンパニー）

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース
より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。
株式会社 丹青社
〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
URL http://www.tanseisha.co.jp

全科協ニュース編集委員会

NHK放送博物館　チーフディレクター　河野光子
滋賀県立琵琶湖博物館　企画調整課長　高橋啓一
ミュージアムパーク茨城県自然史博物館
資料課長　都賀和男
国立科学博物館　普及部　普及課長　武田良正
国立科学博物館　普及部　普及課専門職　原田紀子

全科協事務局

国立科学博物館普及部普及課　村上　剛　園山千絵
Tel.03-5814-9857・9858　Fax.03-5814-9898

発行日　平成14年1月1日
発　行　全国科学博物館協議会©
〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印　刷　島崎印刷株式会社